Coleridge における Orientalism

岡　本　昌　夫

ロマン主義の大きな特色として人びとはしばしば Exoticism を挙げる．これは英独仏ロマン主義共通の特色であり，極めて興味ある研究対象といってよいが，今はこれを英詩人 Coleridge にしぼり，しかもそのExoticism を更に狭く Orientalism にしぼって考察して見ようと思う．

Orientalism といえば Exoticism よりは狭い意味ではあるが，しかしイギリス人に取って Orientalism といってもその意味は必ずしもはっきりしているわけではない．トルコやペルシャを題材にすれば，それは充分にオリエンタルであるといえるであろう．この意味では，William Collins の *Persian Eclogues* (1742, 後 *Oriental Eclogues* と改題された) や Byron の *The Bride of Abydos* (1813) などは代表的な Orientalism の作品である．そしてこのいわゆる近東を材料にした作品は決して少くないのである．しかしながら，更に遠く極東を材料にした作品はヨーロッパ全体を見渡して見ても極めて少ないのであるが，そのうちに Coleridge の *Kubla Khan* を見出すことは極めて意義深いことといわねばならない．〔フランスの Voltaire に *L'orpheline de la Chine* (1755) があり，イギリスの Thomas Percy に *Hau Kiou Choaan* (1761) があるが，前者は紀君祥の元曲『趙氏孤児』の翻案であり，後者は作者不明の清初の小説『好逑伝』のポルトガル語からの翻訳である．〕

さて Coleridge の *Kubla Khan* (1797年に書かれ 1816年に出版) は，彼自身がその「はしがき」で述べているように，彼が *Purchas His Pilgrimage* を読んだ後夢の中で思いついた作品であるが，*Purchas His Pil-*

grimage というのは Purchas が色々の旅行記，航海記を編集したものであり，Coleridge が読んでいて *Kubla Khan* の着想を得たのは，その書物のうちに含まれる Marco Polo's *Travels* であることは，筆者が最近『英語青年』誌上で（68年9月号）詳述した通りである．しからばその Marco Polo's *Travels* と *Kubla Khan* の関係は如何であろうか．

Marco Polo の『旅行記』というのは Marco が25年間を費して達成した東洋旅行の詳細な記録であることは周知のところであるが，殊に彼が17年間仕えた元の大王 Kubla Khan に関する記録は特に詳細であり，Purchas の飜訳でも特に優れた部分である．そこでは Kubla Khan (Purchas では Cublai Can と綴られている）の風貌や生活がくわしく語られると共に，彼が建設した二つの都，すなわち大都（燕京，今の北京の一部，Purchas は Taidu と綴る）と上都（現在内蒙古領で昔竜岡といわれた丘陵の麓にあったが，今は廃墟と化している．Parchas は Xamdu と綴る）のことが精細に語られているのである．そして Coleridge がその詩の材料として特に取り上げたのがこの上都に他ならないのである．*Kubla Khan* は次の諸行を以て初まる．

In Xanadu did Kubla Khan
A stately pleasure-dome decree:
Where Alph, the sacred river, ran
Through caverns measureless to man
  Down to a sunless sea.
So twice five miles of fertile ground
With walls and towers were girdled round:
And there were gardens bright with sinuous rills,
Where blossomed many an incense-bearing tree;
And here were forests ancient as the hills,
Enfolding sunny spots of greenery.

これらの詩行は Marco Palo を読むことなしでは到底書けない多くの要素を含んでいる．Coleridge 自身，自分は Purchas's *Pilgrimage* を読んでこの詩の着想を得たとことわっていることは上述したところであるが，Kubla Khan や Xanadu に関する記事は Marco Polo 以外にはなく，たしかに Coleridge が Marco Polo を読んでいたことがわかるのである．

Purchas には Marco Polo の旅行記を含む書物が二種類ある．*Purchas His Pilgrimage* (1613) と *Purchas His Pilgrimes* 〔くわしくは *Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes* (1625)〕がこれであるが，Coleridge は前者を読んでいたといっているが，Lowes や Coburn 女史の研究によれば，Coleridge はたしかにその両者を読んでいたと思われるのである．ただに *Kubla Khan* を書く前に読んでいただけでなく，その後も読んでいたと思われる証拠もある．Coleridge の *Notebooks* (ed. K. Coburn) によれば，Coleridge は1804年1月の Notebook に "Cublai Chan began to reign, 1256 the greatest Prince in Peoples, Cities, and Kingdoms that ever was in the world." (*Op. cit.*, I. 1840) とあることによっても知られるであろう．この記事の前に *Purchas His Pilgrimes* からの引用があることから推しても，上の記事は明らかに *Purchas His Pilgrimes* による言及であり，それも Marco Polo の紀行によるものであることは疑いを容れないのである．

ところが Coleridge が Kubla Khan のはしがきで自分が Purchas を読んでいたとして引用している部分は実際の Purchas と可成りの相違があるのであって，これは Coleridge が，彼が時々やるように，引用を彼の記憶から引き出しているためであろう．（この点については既にくわしく述べたことがあるので今は省略したい．）とに角 Coleridge は Marco Polo を可成りよく読みこなしていることが注意されるのである．そしてこのことは，彼の詩をよく読むことによって明らかとなるのである．

クビライカン（忽必烈汗）が上都（Coleridge の Xanadu）に pleasure-dome を建て，そこを夏の都とし，そこに6，7，8の三箇月を過したことは Marco Polo の記すところであり，そこに周囲十数哩に及ぶ城壁を持つ美しい庭園と宮殿があったことも，Marco Polo が詳しく述べているのであるが，Coleridge の以上の十数行を読むだけで Marco Polo 描くところの東洋の風景が目に浮ぶのである．

Kubla Khan の最初の行が "In Xanadu did Kubla Khan / A stately pleasure-dome decree:" で初まることは極めて意味深い．先ず 'In Xanadu' といって，イギリス人には極めて耳新しい言葉，しかも極めて exotic な言葉を始めに持って来たこと自体が非常に効果的であるといえる．Xanadu というのは Marco Polo の Xamdu を少し変えた形であるが，Marco Polo の読者以外は誰も知らない名前である．元来Xで初まる固有名詞はイギリスにはなく，僅かにギリシヤに若干の名と地名を見出すに過ぎないのであるが，Coleridge がこの詩の最初にXで初まる個有名詞を持って来たことだけで，極めて exotic な効果を与えているのである．この語の読み方は恐らく [zǽnədúː] であろうが，[kǽnədúː] 或は [ksændúː] と読めば次の Kubla Khan と頭韻をふむことになって韻律的であり，アメリカの小説家 Upton Sinclair が随筆の中でそういっていたと記憶する．

Kubla Khan という名前も勿論 exotic であり，又韻律的であるが，この名は普通ヨーロッパ人には好意的に受取られぬ名前である．即ち，彼の祖父ジンギスカン（Chingiz Khan）の軍は1219年ころから西域諸国を攻略し，現在 Uzbekistan, USSR の領土となっている Samarkand を滅し，1224年ころ南ロシアの大部を攻略し，其後東欧の諸国を侵し，1237年には Moscow や Kiev〔現在 Ukraine〕をも征圧するという状態であり，しかもそのやり方が極めて残酷であったがため，蒙古人はヨーロッパ人から蛇蝎のようにきらわれていたからである．しかし Coleridge は Marco Polo の旅行記のみから，クビライカンを見ていたためか，むしろクビライカン

を美化，もしくは理想化して見ているといってよい．即ち Coleridge の Kubla Khan は，壮大な大宮殿や大庭園を造って，そこで多くの臣を従え，歓楽にみちた優雅な生活をしていると見るのであり，時に祖先の叱咤の声を聞いて驚くのである．この詩全体に歓楽の気分が満ちていることは‘pleasure’という語が幾度も現われることによっても知られるが，その庭園の描写のうちにも，又特にダルシマーを持って歌うアビシニヤの乙女が現われることによっても，又‘honey-dew’や‘milk of Paradise’が現われることによっても知られる．これらは勿論 Coleridge の想像力の所産ではあるが，Marco Polo から得た中国に関する知識が材料となっていることは疑いを容れない．

‘Pleasure’という字が単に innocent な意味で用いられているか，或は sensual な意味に用いられているか，意見の分れるところであるが，Wordsworth が好んで用いた‘joy’と違って，この‘pleasure’はどうやら sensual な意味を含むと見るべきであり，そのことは Marco Polo に多くの sensual な記事があり，それを幾分再現する意図もあったと考えられる．クビライが多くの妻妾を持ち観楽の生活を送っていたことは Marco Polo の次の数行によっても察せられる．

> He hath foure wives which he accounteth lawful, and the first-borne of them succeeded him in the Kingdome. And every one of these is called Empresse, and holdeth a peculiar Court, and that Princely in a proper Palace, having about three hundred chosen Hand-mayds, and Mayd-servants, and many Eunuch servants, and at least thousand persons in their Family. The King hath also many Concubines. (*Purchas His Pilgrimes*, XI, 236–7.)

これらの諸行を読めば Coleridge が‘pleasure-dome’によって何を意味したかが幾分察せられるであろう．次に‘dome’であるが，この‘dome’は勿論 Latin の domus (house) から来た語であり，16 世紀以

後広く用いられるが，その意味は主として‘a stately building or mansion’であって，Coleridge は恐らくこの意味に用いているのであろう．しかし‘dome’には，‘a cathedral church’の意味から円屋根の建物を指す場合があり，Coleridge は中国にこういう円屋根の建物があったことを知っていたのかも知れない．Yule 訳の *The Book of Ser Marco Polo* (2 vols., 1887) によればクビライの時代の北京に Tiantan とよばれる‘Temple of Heaven’があり，それは大きな円屋根三層楼の建物であったが，(*Op. cit.* I. pp. 440–441) Coleridge はそれを知っていたかも知れない．又，周知のように蒙古人は，大きな円形のテントに住んだが，Coleridge は勿論 Marco Polo によってこれを知っており，その image が，彼に‘pleasure-dome’という言葉を使わせたのかも知れない．しかしそれには‘stately’という形容詞がついているのだから，単なるテントではなく堂々たる建物であり，その建物の大きさなどについては Marco Polo に詳細な説明がある．Purchas は“In Xamdu did Cublai Can build a stately Pallace”といっているのだから，Coleridge が Pallace を Pleasure-dome と更めたのは単なる palace 以上の深い意味を含めようと考えたからであり，又 Purchas が単に‘did build’といっているところを Coleridge が‘did decree’と更めているのも極めて意義深く，Kubla Khan の絶対の専政君主たることを暗示して興味深い．又 Marco Polo の単なる紀行を詩に高めている Coleridge の詩的才能はこの二行のうちにも充分に窺われるのである．

Xanadu について付言したいことは，この名は Xamdu として Marco Polo に現われ，Coleridge に詩材を提供したことにおいて極めて意味深い名であるが，其後ただに欧米の書物からその名を消したばかりでなく，中国においても上都の荒廃と共に永らく忘れられて顧みる者もなかったということである．明治の末年において，桑原隲蔵，鳥居竜蔵などによる調査探検が行われたことがあるが，その全貌が明らかとなったのは，昭和16

年（1941）東亜考古学会による調査の後であって，その年出版された『上都—蒙古ドロンノールに於ける元代都址の調査』（東亜考古学会刊）は数十枚の写真と多くの図面によって，その詳細を明らかにしており，Marco Polo の記載の真偽もこれによって判断し得るに至ったのである．（本書の存在を教えられ，それを貸与された東洋史学者三田村泰助氏の御好意に感謝を捧げる．）

ところで Coleridge の詩は，クビライが Xanadu に歓楽宮を作ることを命じたと記した後，そこではアルフ（Alph）なる聖なる流れが，人間には量り得ぬ深い洞窟を通って，陽のささぬ深海にそそぐと歌うのである．この Alph という名は Marco Polo にはなく一般に仮空な Coleridge の想像と考えられているが，しかし Marco Polo に "Wherein〔in the wall〕are fertile meddowes, pleasant springs, delightfull streams" (*Purchas his Pilgrimage*, Bk. IV. p. 415, quoted from *Schneider*, p. 111) 或は "In this enclosure or Parke are goodly meadowes, springs, rivers,..." (*Purchas His Pilgrimes* XI, 231) とあるところから推して，庭園には泉や川があったことは確かであろう．古いその川の名の記載がないので Coleridge は勝手に Alph なる名を与えたと見るべきであろう．ところが Alph なる名は Alpheus を思い起させるが，Virgil の Alpheus はギリシヤから 'land and sea' の下を流れて，遂に Nile 川と結びつく伝説の川であり，その Nile は昔から sacred River といわれ，「そこ知れぬ淵を通って」('per praecipitia hominibus inaccessa') 流れるといわれるのであるが，これは Coleridge の 'caverns measureless to man' と全く同一であり，Coleridge は Virgil を意識して書いたとも考えられる．(Cf. E. Schneider, *Coleridge, Opium and Kubla Khan*, p. 111) 又 Alpheus は Milton によって *Lycidas* や *Arcades* の中に川の名として用いられ，殊に後者において，

'Of that famous Arcady ye are, and sprung
Divine Alpheus, who, by secret sluice,
Stole under seas to meet his Arethuse.' (*Op. cit.*, ll. 29–31)

といっているのと関係が深いように思われる．川を divine といったり，sacred といったりするのは，世界共通かも知れぬが，殊に，われわれには東洋的と感ぜられるし，Coleridge もそれを意識して 'Alph the sacred river' といっているように思われるのである．又 Alpheus を Orpheus と同様であるとして，彼が死んだ愛妻 Eurydice を求めて冥界 (Tartarus) に下り，Persephone の許しを得て彼女をつれて現世に戻りかかるが，出口で失敗する物語を，地下にもぐったり地上に上ったりする Alpheus の川の流れと共通したものと考え Alph は Orpheus をも暗示すると考えることも出来るが，Coleridge がそこまで想像をはせていたかどうかは疑わしい．

又 Alph は，Beer 氏が指摘するように[1]，ヘブライ語の Aleph やギリシャ語の Alpha を連想させ，すべてのものの始まりを暗示すると見る見方もあるが，これは川の流れの意識によって貫かれるこの詩の初めに出て来る川の名として極めてふさわいし名であるということが出来るが，これは Orientalism とは直接関係がないので詳論はさしひかえよう．

"Where Alph, the sacred river" 以下3行は Kubla Khan の庭園の描写であるが，これが極めて興味深い Orientalism で満ちていることを注意しなければならない．大体西洋の庭園には池はあれども川がないのが普通であり，人口的な噴水はあっても普通の泉はなく，すべてが人工的で regular であり，symmetry なのが普通であって，Versailles 宮殿の庭園はその典型的なものと考えられるが，東洋の庭園は自然そのままを真似て irregular であり，谷あり川あり泉ありで，西洋の庭園とは全く対照的といってよかろう．それは少くとも西洋的と違った Orientalism を持っているのである．Coleridge はこの東洋の庭園の特色を巧みに把握し，*Kubla*

Khan の中に素晴らしい描写を与えているのである．それは‘sinuous rills’でかがやき，香ぐわしい香木が花咲き，陽のあたる緑の森があり，深い‘romantic chasm’があり，その chasm からは絶えず水が噴き出し，大きな噴水となって間歇的に涌き出ているのである．そしてその泉は聖なる川の流れとなり，森を抜け，谷を通って数哩もうねうねと流れ，遂に底しれぬ深い洞穴に入って，最後に怒濤の如く大洋にそそぐのである．そこには終始水の流れがあり，そこに‘the dome of pleasure’の影が浮ぶのである．この詩で Coleridge は‘cavern’という字を二度，‘cave’を二度，‘chasm’を同じく二度用いて水の流れの所在を示すと共に，‘sacred river’を三度，‘fountain’を二度，‘sea’，‘rills’，‘turmoil’，‘ocean’，‘ice’など水の流れに関係ある語を次々と用いているのであり，又一方‘tree’，‘forest’，‘greenery’，‘wood’，など樹木に関係ある語をも特に多く用いていることも注意されるが，これは単純な芝生と木の列と噴水以外に何もない西洋の庭園に比して極めて複雑であり，文字通りそこには「多様の統一」があるのである．

Coleridge が中国の庭園に対してかような興味を示したことは，英詩においては極めて珍らしいことではあるが，中国の庭園への関心は Coleridge が初めてではない．すでに17世紀の終りころ Sir William Temple は中国の庭園に異常な関心を示し，*The Garden of Epicurus* (1685) なる論文においてヨーロッパ的庭園と中国式庭園の特徴を比較し，

> Among us, the beauty of building and planting is placed chiefly in some certain proportions, symmetries, or uniformities; our walks and our trees ranged so as to answer one another, and at exact distance. The Chineses scorn this way of planting, and say a boy that can tell an hundred may plant walks of trees in straight lines, and over against one another, and to what length and extent he pleases.

(*Op. cit.* in *Five Miscellaneous Essays*, ed. by S. H. Monk〔Ann Arbor: 1963〕, p. 30)

と述べ，中国式庭園の特質を充分に認めているのであり，又 Sir William Temple 以後 William Mason は *The English Garden*, Bk. II (1777) において Temple の説に讃意を表し，Sir William Chambers は *Designs of Chinese buildings & etc.* (1757) において中国の庭園論を展開し，又更に *Dissertation on Oriental Gardening* (1772) においてこれを再論しているのである（以上 Temple 以後の記載は Arthur O. Lovejoy の *Essays in the History of Ideas*, Baltimore, 1948 中の論文 'The Chinese Origin of a Romanticism' に負うところが多い.）かくしてイギリス文人の一部に中国庭園に関する趣味が持たれ，それが現実にも現われているとすれば，（この点については本号登載の高山修氏の論文を参照されたい.）Coleridge がこれを知らぬ筈はなく，*Kubla Khan* における庭園の描写は以上の諸書に負うところがないとはいえないのである.

かくの如く17世紀末以来勃興して来た東洋的或いは中国的庭園に対する趣味は次第に高まり，Coleridge の *Kubla Khan* において一つの結晶を生み出したとも考えられるのである. Coleridge に取って中国式庭園は一つの美の典型であり，彼のいわゆる「多様の統一」の理論（拙著『想像力説の研究』106 頁以下参照）を満足さすものでもあったのである. 従って Coleridge に取って，中国的庭園は一種の Paradise であったと考えられる. この詩 *Kubla Khan* の最後において一人の怪人物が登場するが，その人物は何か或る恐ろしい魔力を持っていると考えられ，その理由として詩人は

For he on honey-dew hath fed,
And drunk the milk of Paradise. (ll. 53–54)

と述べるのである. Paradise のアイディアは極めて古く，語源的には Hebrew の pardēs に遡ることが出来，更に Old Persian の paeridaēza

(enclosure, park) にも遡ることが出来る．(Xenophon によれば Paradise の語源は Persian であるという．(cf. Temple, *op. cit.*, p. 11) *Septuagint* では Eden's garden の意味に用いられ，*New Testament* では 'the abode of the blessed' の意味に用いられることは周知のところであろう． Purchas の Marco Polo 訳においては， Paradise という語は屢々用いられ，宮殿を含む東洋風の庭園の意味に，広く用いられているといってよい．Marco Polo は中国へ来るまでに，たとえばペルシヤにおいて優れた Paradise を見て来たが，今日の Iran なる Mulehet において或る山嶽地帯の人が立派な garden 即ち Paradise を持っているといって次のように述べる．

> His name was Aloadine, and was a Mahumetan. Hee had in a good Valley betwixt two Mountaynes very high, made a goodly Garden, furnished with the best trees and fruits he could find, adorned with divers Palaces and house of pleasure, beautified with good Workes, Pictures, and Furnitures of silke. There by divers Pipes answering divers parts of those Palaces were seene to runne Wine, Milke, Honey and cleere Water. In them hee had placed goodly Damosels skilfull in Songs and Instruments of Musicke and Dancing, and to make Sports and Delights unto men whatsoever they could imagine.... He made this Palace, because Mahomet had promised such a sensuall *Paradise* to his devout followers.
>
> (*Purchas His Pilgrimes*, XI, 208)

この引用は Marco Polo の目に映じた東洋的庭園の理想の姿であるといってよい．二つの高い峰の間のすばらしい庭園には最良の樹木と果樹が植えられ，更にそこには立派な宮殿があり，それは立派な細工物や絵画や絹の調度の品々で満ちている．又その宮殿には葡萄酒や乳や蜂蜜や清水を通すパイプが四方に走っているといったぜいを尽したものである．又そこには歌や踊や楽器に巧みなみめ美しい乙女たちがいて，色々の娯楽やスポー

ツを見せてくれる．これが東洋の Paradise であるというのである．

ここに画かれているのはペルシヤの庭園或は楽園であるが，われわれはこれが Coleridge の *Kubla Khan* に描かれている光景と余りにも類似しているのに驚くのである．Coleridge は先に説明したような東洋的庭園を描いた後，

A damsel with a dulcimer
In a vision once I saw:
It was an Abyssinian maid,
And on her dulcimer she played,
Singing of Mount Abora.

と歌って，アビシニヤの乙女を持ち出し，その乙女がダルシマーなる古琴をうち鳴らしつつ Abora の山の歌を歌うというのであるが，Coleridge のいう 'Abyssinian maid' とはどこの乙女であろうか．Abyssinia は勿論 Ethiopia の古名であり，Marco Polo によれば，これは Middle India (in Africa) であり，そこの主な王は Christian であるという．従って Coleridge は Abyssinia で以て聖書を思い出し，聖書に出て来る (Daniel. iii, 10) dulcimer を思い起しているかも知れない．しかし聖書のダルシマーは wind instrument で日本の聖書では「風笛」と訳されているからこの場合「風笛」を吹きながら歌うというのは不合理で，Coleridge はこの場合やはり15世紀以来用いられている絃楽器の意味で用いたと見るべきであろう．更に付言すれば，Marco Polo は India という言葉を Indus 川の東の意に用い，middle India といえば India ほど遠くはないがその途中の東方の国の意であろう．(cf. *OED* and Purchas)

更にダルシマーに関連して述べれば，この楽器は四角な反響箱の上に多くの絃を張ったピアノの前身ともいうべき楽器で，首からバンドでぶら下げたり，左手に持ったりして奏したものであって伴奏用に用いられた．元来楽器というものは案外遠くまで伝わるものであって，今日正倉院に蔵さ

れる四絃及び五絃の琵琶はペルシヤやパキスタンから渡来したものであり，琵琶（びわ）という言葉も語源はペルシヤ語であるといわれるのであるが，ダルシマーはたとえ最初はギリシヤあたりのものであったとしてもインドや中国に伝わらぬ筈はなく，クビライカンの宮廷で奏せられたとしても不思議ではない．

次に‘Abyssinian maid’であるが，Marco Polo によれば，大都郊外には the Lombards, the Germans, the French などの商人に対し，それぞれ立派な hostels があったというのであるから（*The Travels of Marco Polo*, "Penguin Classics", p. 129）遠くヨーロッパの諸国の人々さえ多数来ていたと考えられ，従ってペルシヤやアビシニアの美女が来ていたとしても不思議ではない．今日の東洋史家の説によれば，中国の宮廷には隋唐時代から外国の美女がいたようであり，そのうちにはペルシヤやアラビアあたりから来た者もいたということである[2]．宮廷ばかりでなく，唐時代長安などの一寸した酒楼には胡の美人がいたのであって，これは白楽天や李白の詩を読む者は皆知っていることである[3]．胡というのは，諸橋轍次著『大漢和辞典』によれば，秦漢以来用法に若干の差はあるが，胡夷などという時は胡は西方，夷は東方のえびすの意であり，胡姫といえば専ら西域の胡女をいった．西域とは中国西方の外国を総称するに用いられたが，広義には，今の印度，イラン地方や小アジア，エジプト地方を含み白楽天や李白のいう胡姫とは，どうやらイラン系美人を指したものと思われる．（『中国詩人選集』（岩波書店刊）『白居易』，『李白』注参照．）従ってクビライカンの時代に大都や上都に胡の美人がいたことは容易に想像がつくのであって，Coleridge が *Kubla Khan* において，Abyssinian maid を持ち出したことは，決して根拠のないことではないのである．

John Beer 氏は *Kubla Khan* における内容の論理的不統一を挙げ，そこに Mount Abora や Abyssinian maid が現われることを非難するようであるが[4]，これは根拠なき非難であるといわねばならず，又 Adair 女史

がいうようにこの詩が意識の流れの手法によって書かれたと見るならば，尚更 Coleridge の立場を支持しなければならないのである．

まだ残された問題はいろいろあるようである．殊にこの詩の最後に現われる輝く目と流れる髪の毛を持つ不思議な人物については，その東洋的意味を検討しなければならぬと思われる．また

Weave a circle round him thrice.

の意味についても，その東洋的 sorcery の立場からの検討が必要であろう．また，'honey-dew' や 'the milk of Paradise' の意味についても若干の考察がなされねばならない．しかし本稿においては，も早紙面もつきたので，これらの点については，後日の研究に待たねばならない.[5]

結局本稿において筆者が述べたことは，Coleridge の *Kubla Khan* が，極東の事物を題材とする極めて数少ない英詩の一篇であり，その Orientalism は誠に手際よく表明され，人々をたぐいまれな exoticism の世界に導くのであるが，その詩に inspiration を与えたものは Purchas 訳の Marco Polo's *Travels* であったということと，それに加えて，Coleridge の色々の東洋西洋の知識が，いわゆる意識の流れの原則に従ってあふれ出し，渾然たる芸術作品を構成しているということであり，そこには Coleridge の想像力説の根底に存する「多様の統一」の原理が見事に働いているということである．

注

1) John Beer, *Coleridge the Visionary* (London: 1959), p. 208 ff.
2) 岩村忍『西域とイスラム』(中央公論社刊) p. 168 以下参照.
3) 白居易「胡旋女」「西涼伎」李白「少年行」「送裴十八図南帰嵩山」「前有樽酒行」其他.
4) Beer, *Op, cit*, p. 207.
5) 近く『同志社女子大学研究年報』において発表する予定である.